

## 北太平洋と日本におけるさけ・ます類の資源と増殖

えづれ むつこ  
江連 睦子 (企画課情報係長)

## 2004年の北太平洋

## 漁獲数

第13回NPAFC年次会議における各国の報告によると、2004年1-12月の北太平洋の漁獲数は3億4,391万尾で、前年の4億2,878万尾より20%減少しました(図1A)。

これを魚種別に見ると、カラフトマスが最も多い1億8,247万尾で全体の53%を占めており、前年の2億8,200万尾に比べ35%減少しました。次いでサケが9,961万尾(構成比29%,対前年比100%)、ベニザケが5,228万尾(構成比15%,対前年比130%)と続き、これら3魚種で97%を占めています。ギンザケとマスノスケは、それぞれ対前年比135%,108%でした(図1A)。

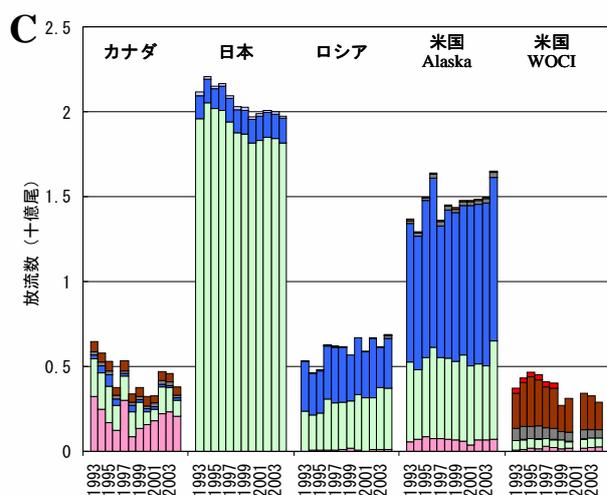
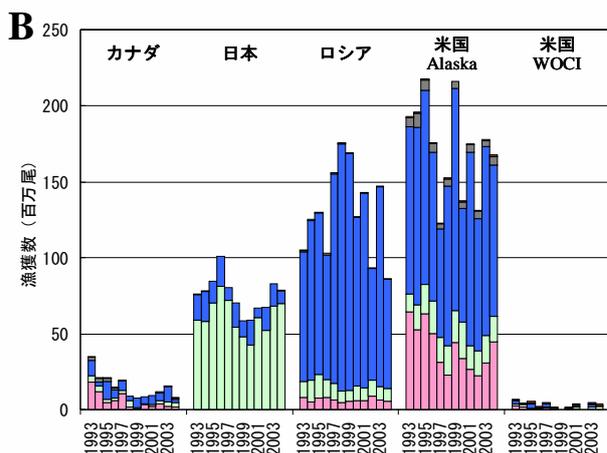
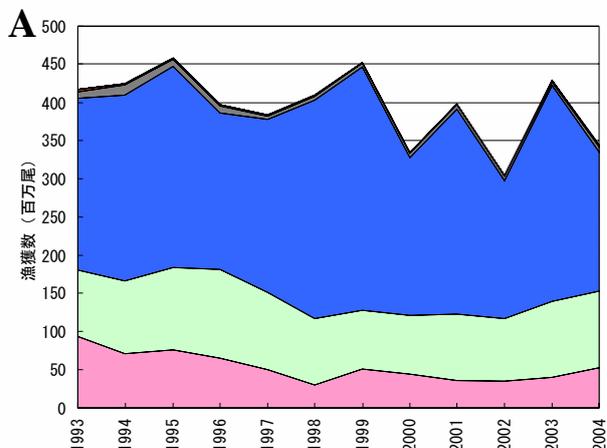
地域別では、アラスカ州が1億6,758万尾と最も多く、以下、ロシア8,630万尾、日本7,848万尾、カナダ771万尾、韓国3万尾と続いています(図1B)。

## 人工ふ化放流数

2004年1-12月に人工ふ化放流された幼稚魚数は49億9,150万尾で、前年の49億934万尾に比べ1.7%増加しました。

魚種別ではサケが29億1,574万尾で半数以上を占め、これに次ぐカラフトマスの14億2,404万尾と合わせると全体の8割以上を占めます。

地域別では日本が19億7,721万尾と最も多く、以下、アラスカ州16億5,101万尾、ロシア6億8,588万尾、カナダ3億7,668万尾、WOCI2億8,779万尾、韓国1,293万尾と続いています(図1C)。



魚種未報告    ベニザケ    サケ  
カラフトマス    ギンザケ    マスノスケ  
スチールヘッド    サクラマス

図1. 1993-2004年の北太平洋におけるさけ・ます類の魚種別漁獲数(A)、地域別魚種別の漁獲数(B)及び人工ふ化放流数(C)。1993-1998年は「NPAFC Statistical Yearbook」による商業漁獲数の確定値だが、1999年以降はNPAFC年次報告等で示された暫定値である。1998年までのロシアにはEEZ(排他的経済水域)で他国が漁獲したものを含む。WOCIはワシントン、オレゴン、カリフォルニア、アイダホ州の合計。WOCIで図示していない年があるのは未報告のためである。韓国は他国と比較してわずかなため、図では省略している。

2005年度の日本

サケ

2005年度の来遊数（沿岸海面での商業漁獲と内水面での親魚捕獲の合計）は1月31日現在で7,094万尾、前年度同期比92%となっています。来遊数の年変動をみると、1996年度に過去最高を記録した以降、4年連続で減少しましたが、2001年度以降は増加傾向に転じています（図2）。

これを道府県別にみると、合わせると全体の9割以上を占める北海道、岩手県で、前年度比93%、90%と前年度を若干下回り、青森県では前年度比

65%と大きく下回りました。一方、本州太平洋側の宮城県以南の各県及び日本海側の秋田、富山県で前年度を1-2割程度上回っています（図3）。

海区別に最近10年間の動向をみると、いずれも1996年度以降数年連続して減少し、その後は回復傾向が見られる中、2005年度においては北海道根室海区を除く全海区において前年度を若干下回りました（図4）。

なお、採卵数は22億3,400万粒を確保し、計画数21億6,600万粒を満たしていることから、放流数もほぼ計画どおりの18億1,000万尾程度となることを見込まれます。

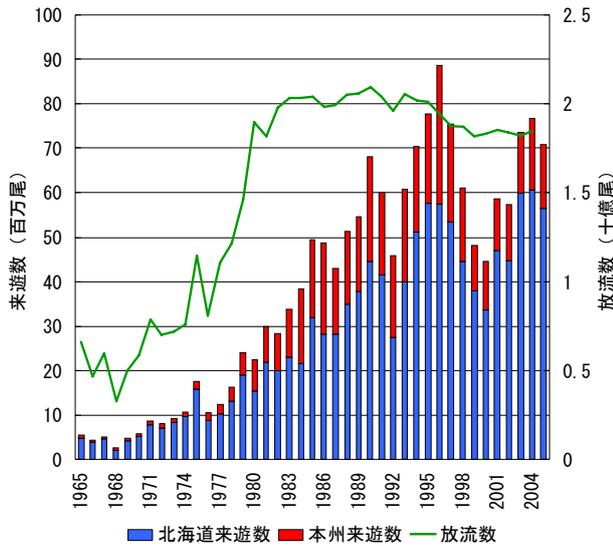


図2. 1965-2005年度の日本におけるサケの来遊数と人工ふ化放流数。2005年度は1月31日現在。

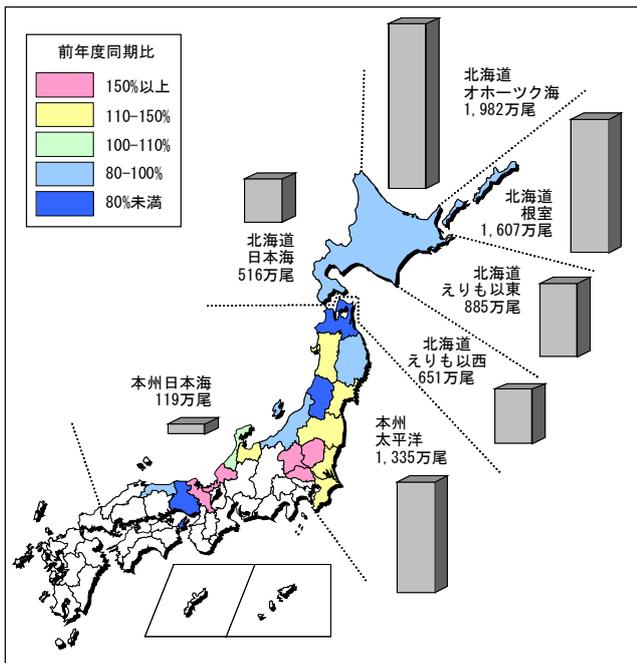


図3. 2006年1月31日現在の日本におけるサケの来遊数。直方体の高さは来遊数の相対的な大小、色分けは対前年度同期比を示す。

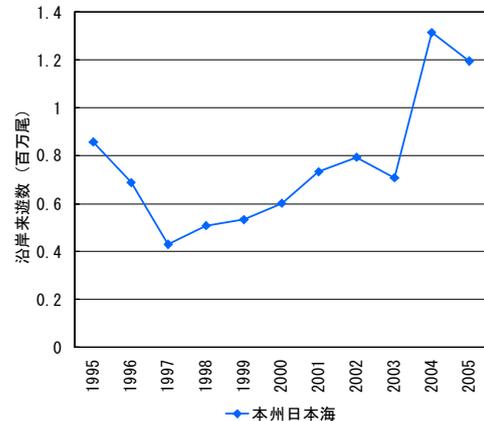
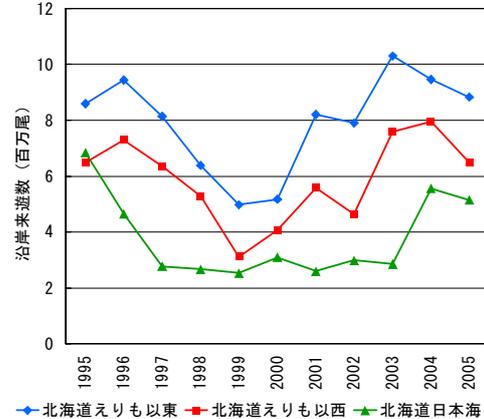
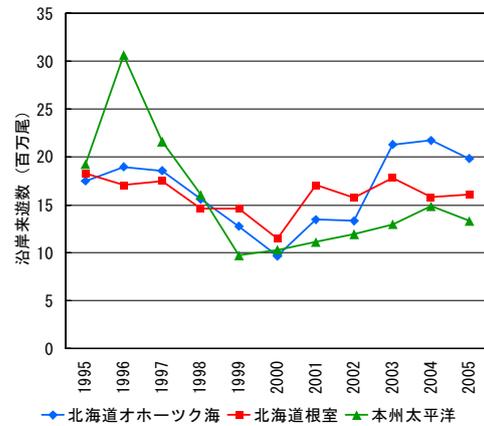


図4. 1995-2005年度の日本におけるサケの海区別来遊数。2005年度は1月31日現在。

## カラフトマス

主産地である北海道における2005年度来遊数は900万尾で前年度比156%となりました。カラフトマスの来遊数は1994年に急増して以来、隔年の資源変動を示し、1994-2002年の偶数年級群での平均が1,500万尾、奇数年級群のそれは700万尾で、両者にはおよそ2倍の開きがありました。こうした中であって2005年度は不漁年にあたりませんが、不漁年としては比較的高水準の回帰となり、結果として、豊漁年ながら異例に低い水準であった前年度と逆転した形となりました。なお、採卵数は1億7,600万粒でほぼ前年と同数なので、放流数も前年並みの1億4,000万尾程度となることが見込まれます(図5)。

## サクラマス

2005年度の北海道における河川捕獲数は4,000尾で前年度比46%と半減しましたが、採卵数は400万粒でほぼ前年度並みとなっております。なお、本州の資源については現在調査中です(図6)。

## ベニザケ

2005年度の河川捕獲数は594尾で前年度比119%とやや増加しましたが、採卵数は24万粒と前年度を下回りました。当センターでは北海道の3河川でベニザケの人工ふ化放流に取り組んでいますが、近年は1990年代前半に比べると少ない状態が続いています(図7)。

## 放流数の年度区分

放流数に用いる年度区分については、一般的な3月末で区切る会計年度とは期間が異なります。サケの場合を例にとると、親魚の回帰時期は8月から2月にかけてで、この親魚から得た種苗は翌年の1月から6月にかけて放流されます。サケの人工ふ化放流は親魚の捕獲を起点として、その親魚から得た種苗を放流し終えるまでを一つの周期としているため、「2005年度の来遊数」は2005年8月から2006年2月にかけて来遊した尾数を指しますが、「2005年度の放流数」の場合は2006年1月から同年6月までに放流された尾数を指しており、会計年度でいうところの2005年度に放流した分も一部含まれています。

なお、NPAFCの統計の場合は漁獲も人工ふ化放流も年、すなわち1月から12月までを単位とすると定められています。このため本稿では、NPAFCの資料を使用する北太平洋の漁獲数、放流数については「年」、日本の来遊数、放流数等については「年度」と使い分けており、例えば2004年の放流数と2004年度のそれは一致しないのでご注意ください。

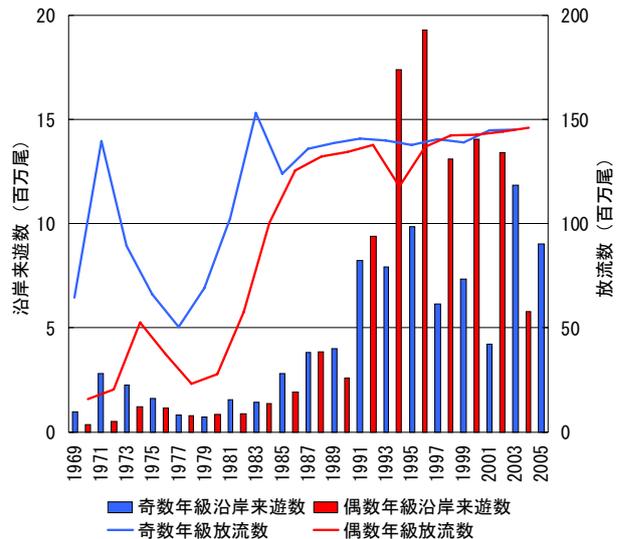


図5. 1969-2005年度の日本におけるカラフトマスの来遊数と人工ふ化放流数。2005年度は概数。

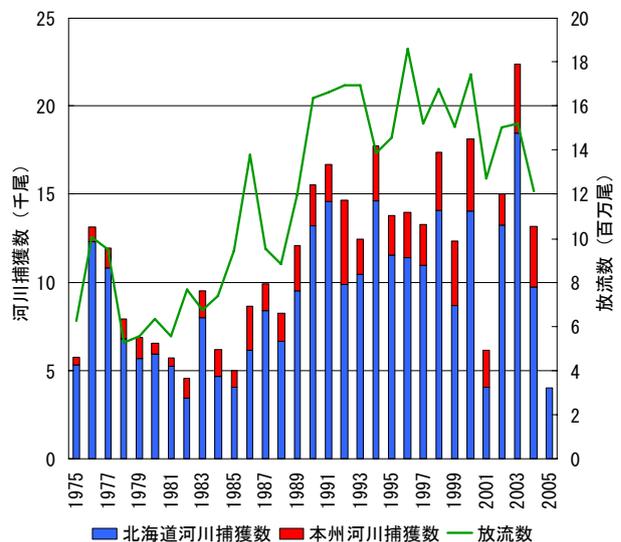


図6. 1975-2005年度の日本におけるサクラマスの河川捕獲数と人工ふ化放流数。2004-2005年度は概数。

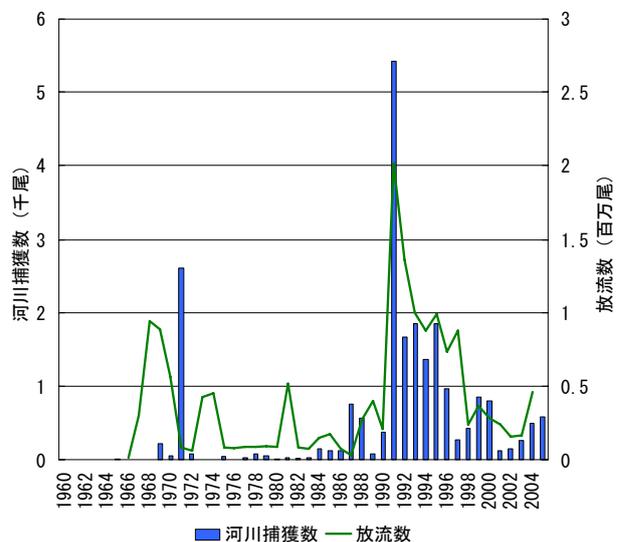


図7. 1960-2005年度の日本におけるベニザケの河川捕獲数と人工ふ化放流数。